

お客様各位

カタログ等資料中の旧社名の扱いについて

2010年4月1日を以ってNECエレクトロニクス株式会社及び株式会社ルネサステクノロジが合併し、両社の全ての事業が当社に承継されております。従いまして、本資料中には旧社名での表記が残っておりますが、当社の資料として有効ですので、ご理解の程宜しくお願い申し上げます。

ルネサスエレクトロニクス ホームページ (<http://www.renesas.com>)

2010年4月1日
ルネサスエレクトロニクス株式会社

【発行】ルネサスエレクトロニクス株式会社 (<http://www.renesas.com>)

【問い合わせ先】 <http://japan.renesas.com/inquiry>

RENESAS TECHNICAL UPDATE

〒100-0004 東京都千代田区大手町 2-6-2 日本ビル
株式会社 ルネサス テクノロジ
問合せ窓口 E-mail: csc@renesas.com

製品分類	開発環境	発行番号	TN-CSX-071A/JA	Rev.	第1版
題名	SuperH RISC engine C/C++コンパイラ Ver.7 不具合のご連絡(11)		情報分類	使用上の注意事項	
適用製品	P0700CAS7-MWR P0700CAS7-SLR P0700CAS7-H7R	対象ロット等 Ver.7.x 台	関連資料	SuperH RISC engine C/C++コンパイラ、 アセンブラ、最適化リンケージエディタ ユーザーズマニュアル RJJ10B0052-0100H 第1版	

SuperH RISC engine C/C++コンパイラ Ver.7.x 台に別紙に示す不具合があります。

当該バージョンをご使用の場合はご注意ください。

型名	パッケージバージョン	コンパイラバージョン
P0700CAS7-MWR	7.0B	7.0B
	7.0.01	7.0.03
	7.0.02	7.0.04
	7.0.03	7.0.06
	7.1.00	7.1.00
	7.1.01	7.1.01
	7.1.02	7.1.02
	7.1.03	7.1.03
P0700CAS7-SLR	7.0B	7.0B
	7.0.02	7.0.03
	7.0.03	7.0.04
	7.0.04	7.0.06
	7.1.00	7.1.00
	7.1.01	7.1.01
	7.1.02	7.1.02
	7.1.03	7.1.03
P0700CAS7-H7R	7.0B	7.0B
	7.0.02	7.0.03
	7.0.03	7.0.04
	7.0.04	7.0.06
	7.1.00	7.1.00
	7.1.01	7.1.01
	7.1.02	7.1.02
	7.1.03	7.1.03

なお、チェックツールを以下の URL より入手できます。

<http://www.renesas.com/jpn/products/mpumcu/tool/index.html>

添付：P0700CAS7-040409J

SuperH RISC engine C/C++コンパイラ Ver.7 不具合内容(11)

SuperH RISC engine C/C++コンパイラ Ver.7 不具合内容(11)

SuperH RISC engine C/C++コンパイラ Ver.7台における不具合内容を以下に示します。
本不具合のチェックツールを以下 URL より入手できます。
<http://www.renesas.com/jpn/products/mpumcu/tool/index.html>

1. コピー伝播不正

【現象】

複数の分岐元を持つブロックにコピー命令が存在した場合、不正にコピー命令を削除する場合があります。

【例】

```
int func(int *x) {
    int ret=0;
    while(*x++){
        if(*x==1){
            ret+=2;
        }
    }
    return (ret+2);
}
```

```
_func:
    MOV        #0,R5        ; 不正にコピーを削除した結果 R7 -> R5 へ変換
L11:
    MOV.L     @R4,R2
    ADD      #4,R4
                                ; *1 MOV R7,R5 を不正に削除
    TST      R2,R2
    ADD      #2,R5
    BT       L13
    MOV.L     @R4,R0
    CMP/EQ   #1,R0
    BT       L11            ; *2 *3 により BF L11 を変換
    BRA      L11
    NOP
                                ; *3 MOV R5,R7 を不正に削除
L13:
    RTS
    MOV      R5,R0
```

【発生条件】

以下のすべての条件を満たした場合に発生することがあります。

- (1) optimize=1 を指定している。
- (2) 条件文を記述している。
- (3) 複数の分岐元を持つブロックにコピー命令が存在する(例では*1)。
- (4) (3)の分岐元のブロックにコピー命令のコピー元レジスタ(例では R7)の定義がないパスがある(例では*2 から L11 へ分岐するパス)。

【回避方法】

該当箇所が存在した場合、以下の方法で回避していただきますようお願いします。

- (1) 該当ファイルを optimize=0 オプション指定する。

2. 不要式削除不正

【現象】

条件文の then 節、あるいは else 節に代入式があり、その直後に同じ変数同士の代入式を記述した場合、不正に条件文を削除する場合があります。

【例】

```
int x;

void f(int y){
    if (y>=256){          /* 不正に削除          */
        x=0;              /* *1          */
    }
    x=x;                  /* *2 同じ変数同士の代入文削除 */
    x++;
}

void f(int y){
    x=0;
    x++;                  /* x=0 を伝播 */
}

void f(int y){
    x=1;
}
```

【発生条件】

以下のすべての条件を満たした場合に発生することがあります。

- (1) optimize=1 を指定している。
- (2) 条件文を記述している。
- (3) (2)の条件文の then 節もしくは else 節に代入式がある(例では*1)。
- (4) (2)の条件文の後に(3)の代入先変数同士の代入式がある(例では*2)。

【回避方法】

該当箇所が存在した場合、以下のいずれかの方法で回避していただきますようお願いします。

- (1) 該当ファイルを optimize=0 オプション指定する。
- (2) 該当ファイルを opt_range=noblock オプション指定する(Ver.7.0.06 以降)。

3. GBR 相対論理演算不正

【現象】

#pragma gbr_base/gbr_base1 を指定した 1byte の配列、もしくはビットフィールドメンバに対し論理演算を行った場合、論理演算の結果を不正な領域に書き込む場合があります。

【例】

```
#pragma gbr_base a,b
char a[2],b[2];
void f() {
    a[0] = b[0] & 1;
}
```

```
MOV        #_b-(STARTOF $G0),R0
RTS
AND.B     #1,@(R0,GBR)           ; 演算結果を b[0] に書き込み
```

【発生条件】

以下のすべての条件を満たした場合に発生することがあります。

- (1) gbr=user を指定している。
- (2) #pragma gbr_base/gbr_base1 で以下の変数を指定している。
 - ・ (unsigned)char 型の配列
 - ・ (unsigned)char 型のメンバを持つ構造体配列
 - ・ (unsigned)char 型の配列メンバを持つ構造体
 - ・ 8bit 以下のビットフィールドメンバを持つ構造体
- (3) (2)の変数(例では b[0])に対して定数との論理演算(&, |, ^)を行っている。
- (4) (3)の演算の代入先変数(例では a[0])が(2)の条件を満たす。
- (5) (3)(4)の変数は別変数、同じ配列で別要素、または同じ構造体で別メンバである。

【回避方法】

該当箇所が存在した場合、以下のいずれかの方法で回避していただきますようお願いします。

- (1) #pragma gbr_base/gbr_base1 指定をやめる。
- (2) gbr=auto を指定する(Warning を出力し、#pragma gbr_base/gbr_base1 指定を無効にする)。
- (3) 論理演算の結果をいったん volatile 指定したテンポラリ変数に代入する。

例：

```
void f() {
    volatile char temp;
    temp = b[0] & 1;
    a[0] = temp;
}
```

4. 符号拡張削除不正

【現象】

変数、定数アドレスや配列のインデックスを明示的に 1,2byte にキャストした後に、その値を用いてメモリアクセスを行った場合、キャストが削除され不正なメモリ領域をアクセスする場合があります。

【例】

```

unsigned short x;
char a[1000];

void f() {
    a[(char)x] = 0;
}

MOV.L    L11+2,R2      ; _x
MOV.L    L11+6,R6      ; _a
MOV.W    @R2,R5
EXTU.B   R5,R0
MOV      #0,R5         ; EXTS.B R0,R0 を削除
RTS
MOV.B    R5,@(R0,R6)   ; x が 0~127 の範囲外の時、不正アドレスを
                       ; 参照する場合あり

```

【発生条件】

以下のすべての条件を満たした場合に発生することがあります。

- (1) optimize=1 を指定している。
- (2) 変数アドレス、定数アドレス、配列のインデックスを明示的に 1,2byte にキャストしている、もしくは当該関数が char/short の仮引数を持ち、その引数を配列のインデックスのみで使用している。
- (3) (2)の値を用いてメモリアクセスを行う。

【回避方法】

該当箇所が存在した場合、以下の方法で回避していただきますようお願いします。

- (1) 該当ファイルを optimize=0 オプション指定する。

以上